

# \* ピースウィンズ・ショップから \*

東日本大震災が起きた早春から、季節を2つまたぎ冬ややってこようとしています。

震災後、PWJフェアトレード部では東北特定寄付付きコーヒーを販売して皆さんにも東北を応援していただきました。

以前からお付き合いのあった宮城県にある福祉施設「くりえいと柴田」さんも被災され、製造ラインが止まってしまったのですが、5月末から製品の出荷が再開され、PWJではお豆腐屋さんのつくったゆば入りトマトカレーを東北応援商品としてホームページでご紹介してきました。

このたび、もっと東北を応援したい！ということで、牛タンカレー、かぼちゃカレー、チョット辛いラー油（ずんだ入り、牛タン入り）の販売も開始しました。

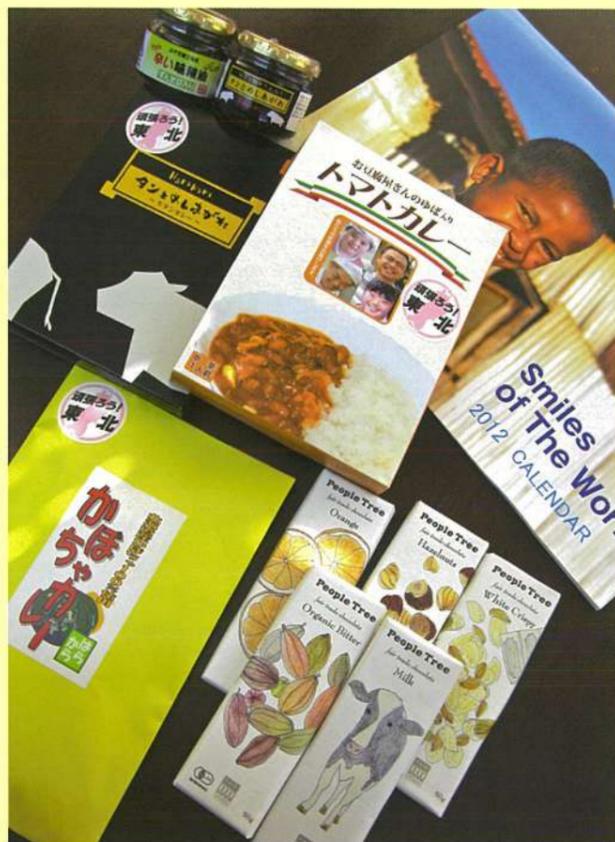
また、毎年好評のPWJのスタッフが撮影した素敵な笑顔が満載のオリジナルカレンダー、冬季限定のチョコレート、各種お歳暮の販売も開始していますので、この機会にぜひご利用ください。

フェアトレードは海外だけというイメージも強かったのですが、最近では国内でのフェアトレードという言葉も使われ始めました。作る人の想いのこもった国内外のフェアトレードの応援を引き続きよろしくお願います。

ご注文は、<http://www.peace-winds.org/shop/>

同封のご注文用紙または  
TEL03-5213-4073、FAX03-3556-5772まで。

※ピースウィンズ・ショップの収益はPWJの支援活動に活用されています。



「やっときたー！」と声を上げたのは、宮城県南三陸町歌津漁協の支所長千葉さん。ピースウィンズ・ジャパン (PWJ) が提供した浮きやロープなどの漁具が無事に倉庫に納品され、漁の再開に必要なものが徐々に整っていった状況を見て、いつもは口数少ない千葉さんが「ありがとう。まだまだだけども、ここからがんばっべし」と、気合を込めた言葉を口にした。

PWJは2011年3月の震災後、南三陸町の漁業復興に向けて動き出していた歌津漁協と志津川漁協の関係者と早い段階から話し合いを進めてきた。まずは今後の見通しを立てる上で、基盤整備のため最初の情報となる海底調査に必要な器材をそろえ、海辺のがれき撤去作業用の長靴やレインコートなどを提供した。

南三陸町の漁協支援を担当するPWJ西城は、この町の出身。青年海外協力隊員として活動していた南米パラグアイから戻って目にした故郷は変わり果て、実家も家族が営む鮮魚店も津波で跡形もなく消え失せていた。事務所も失くした二つの漁協を支えている地元の漁師たちに声をかけながら、自分たちの活動が「この町の漁業を立て直す起爆剤になれば」との思いを胸に毎日の業務を続けている。

11月には南三陸町で孵化・育成され川に放流されたサケが、4年の年月をかけた故郷の川に今年も戻ってきたという明るいニュースも聞こえてきた。PWJは今後サケ・ますの孵化事業に関わる支援や、わかめ養殖、加工事業の支援を進める予定だ。地元の人びとが主体となって地域の復興が加速するように、PWJはこれからも現場のニーズに応じた支援を展開していく。



漁師さんとのコミュニケーション



わかめ養殖用に提供した漁具



東北被災地 復興支援

# 希望を託して ふるさとへの地に

## 支援地レポート

### 広島

災害救助犬として訓練を重ねてきた4頭のうちの2頭（リーベ・カズ）は、個性や適性を踏まえ、高齢化対策が課題となっている神石高原町役場から依頼があったことも考慮して、福祉施設などで暮らすお年寄りの方々のために「セラピー犬」として訓練していくことにしました。救助犬としての2頭については、能力を高めるべく、咆哮（吠えること）訓練や「かくれんぼ」を取り入れた訓練などに力を入れています。



### イラク



北部アクリ郡で2010年3月から小学校の増築、修復事業を開始し、2011年5月末に完了しました。生徒のひとりには「以前の土壁の教室は窓がなく冬には寒いうえ、机を3人で使っていたので勉強に集中できませんでした。新しい校舎を見たときは嬉しくてたまりませんでした。もう教室も狭くなく、モジラミや動物の糞の心配もありません」と学校環境の改善に目を輝かせています。

### スリランカ

内戦後に故郷に戻った人びとが、再び安定した生活ができるようにPWJは「生計支援パッケージ」の配布を実施しています。対象となる家族それぞれの状況や職業、持っている技術によって、パッケージを選ぶようにしています。洋裁に必要なミシンなどを受け取って仕立屋を始める女性や、ヤギを受け取り現金収入につなげる家族など、人びとが生計を立て直すきっかけを支援しています。



東アフリカの干ばつ被害の現地調査

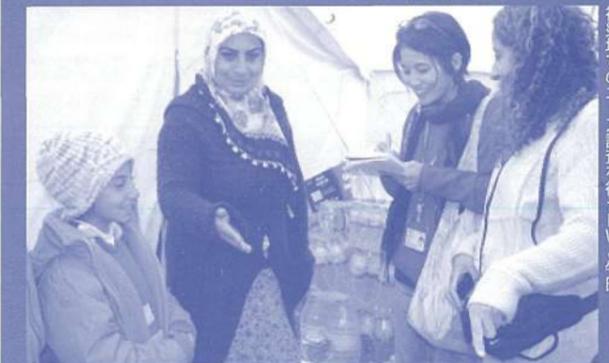
10月9日から約2週間の日程で、ケニア北東部の干ばつ被害の現地調査をPWJ 山本、角免、西野の3名が実施。50万人にふくれあがったソマリア難民キャンプ内でのシェルター（住居）の資材提供などの支援を中心に、キャンプおよび周辺地域における教育支援などの実施を計画しています。



周辺住民への調査を行うPWJ西野

トルコ地震の被災者へ物資配布

10月23日にトルコ東部で発生した地震に対応して、PWJ 柴田、牛田、イラク事業責任者Kawaの3名が現地入り。被災地ワンおよび周辺地域を中心に被災状況の確認とニーズ調査を行い、毛布や衛生用品と下着セット(487世帯向け)を被災地域にて配布しました。



被災地でのニーズ調査を行うPWJ牛田

タイ洪水の被災地域への物資配布

7月以降続いている豪雨により、タイでは洪水被害が発生。PWJは協力団体であるCivicForce及び現地NGOのミラー基金と連携し、PWJ 佐藤真央が11月2日に現地入り、被災地域の住民にコメや油などの緊急物資を提供しました。



僧寺で物資を提供するPWJ佐藤

- 8/16 広島の災害救助犬育成プロジェクトが読売新聞社会面で紹介
- 8/28 PWJ 児島のインタビューとアフガン事業が神戸新聞で紹介
- 9/25 JICA 国際協力イベントでのPWJ 西城の対談が読売新聞に掲載
- 10/13-11/17 AM ラジオ局ニッポン放送に、PWJ 西野がゲスト出演
- 10/10 PWJ ハイチ事業が、東京新聞で紹介
- 11/4 朝日新聞 GLOBE に、PWJ 備中のインタビューと東北事業が紹介
- 11/15 中国新聞に、PWJ 國田の寄稿文が掲載

メディア掲載報告

支援の現場から

2011年10月14日、気仙沼市立鮎立児童館が主催した運動会の運営を支援しました。

この児童館は震災後約3か月間避難所として使われ、震災により市の補助金が減るなど、運営面での困難が続いていました。例年イベントを手伝ってくれる地域の人びとも被災し、人手が必要とのことで、PWJが支援することになりました。1時間半の運動会では、子どもたちは久々に広い室内を元気に走り回り、玉入れ、バルーン遊び、リレーなどの種目を楽しんでいました。70人ほどの参加者すべてが、楽しいひと時を過ごしました。「ありがとう。子どもたちから元気ももらいました。」とお土産のお守りを受け取って涙ぐむ参加者の方もおられ、お母さんがお子さんを連れて高齢者の方々と談笑される光景も見られました。この活動を通じ、児童館の先生方と信頼関係を築くことの大切さと、子どもの支援のためには、高齢者を含めた大人の方々との協力が必要だということ改めて学びました。これからも地元の方々の声を大切に、支援を続けていきたいです。

PWJ東北事業担当 藤嶋美世



■及川商店さん

震災前から個人宅に米や醤油を行商していた及川さん。震災後は、移動販売車で味噌や焼き魚といった商品を扱っています。流されてしまった商店の近くにプレハブを建て、冷蔵庫や作業台を設置して仕入れの倉庫にしています。「顔なじみのお宅に伺うと、震災後の近況などを話し込んでしまい、1日何軒も回れなくて。」と苦笑しつつ、陸前高田から気仙沼・南三陸まで、足を伸ばしています。



移動販売車が被災地で営業することで、買い物に不便な立地条件の仮設住宅で暮らす被災者たちの助けにもなっています。今後もPWJは、陸前高田市、大船渡市、南三陸町の商工会や商工会議所を通じ、仮設店舗で営業を再開する事業者への備品支援などを展開し、地域の経済復興を支えていく予定です。

子どもを取り巻く地域社会を支える



PWJは、気仙沼市と陸前高田市を中心に、避難所、仮設住宅、児童館などにおいて、被災した子どもたちが安心して遊べる場所を提供する「アート&スポーツキャラバン」を実施してきました。体を動かすことでストレスを解消したり、創作活動を通じて自由に自己を表現できるようになることがねらいです。夏には、うちわ制作やプール遊び、バーベキュー、秋からはフットサル大会や化学実験教室など、様々なイベントも開催。9月末までにのべ40か所での行事に1,222人の子どもたちが参加しました。

子ども向けだけでなく、地元の人びとがお茶を飲みながら、日ごろ抱えている不安や悩みなどを気軽に話せる活動「お茶っこ」も、ソーシャルワーカーなどが同席して行っています。また、学校や児童館の先生、学童保育の指導員、保護者などを対象にしたワークショップや研修会なども開催しており、被災地の人びとが手を取り合っ、地域の子どもたちを育ていける環境作りのお手伝いをしています。

PWJは2011年3月の東日本大震災発生以来、岩手県、宮城県で被災者支援を続けています。

- ①仮設住宅入居者への生活用品の提供
- ②地域の経済復興
- ③子どもの遊び支援を活動の3つの柱としています。厳しい冬前に被災地の状況も変わってきており、支援内容も新たなニーズに対応するように調整しながら進めています。

仮設住宅への生活用品の提供

PWJは4月上旬から岩手県の仮設住宅等に入居した8,506の被災者世帯に布団や台所用品などの生活用品を提供しました。厳冬の到来に備え、暖房器具の配布について各世帯にアンケート調査を実施するなど準備を進めてきました。各自治体との協議の結果、陸前高田市の全仮設住宅2,148世帯にファンヒーターを、大船渡市の1,811世帯にホットカーペットをそれぞれ提供しました。また、岩手県復興局との協議に基づいて、同県のほぼ全域の雇用促進住宅、民間借り上げ住宅等に入居した被災世帯に暖房器具を提供する支援を現在進めています。

地元の人びとの生計支援

被災地の復興には地域の産業を復活させ、経済の循環を取り戻すことが欠かせません。

PWJは、地元の商工団体や漁協などと連携し、商業や漁業の再開を支援しています。

例えば、岩手県陸前高田市ではこれまでに9台の移動販売車がスタート（うち、2011年12月現在は6台が稼働）、宮城県南三陸町では10台が営業を開始しています。鮮魚店や花屋の卸、パン屋などが営業を行っています。

買い物を通じて地域の交流の場を

■村上商店さん

陸前高田で魚屋を営んでいた村上善喜さんは、被災により妻を亡くただけでなく、魚屋の店舗も奪われました。「何かを始めたい。動かなければ。」という思いから移動販売車の営業を開始。いつも「魚屋さんが来た」と言われるほど車には鮮魚がぎっしり。「お客さんから野菜を要望されて、仕入れてみた」など、買い物客とのコミュニケーションを大切にしながら営業しています。

